

# 限りなき世界

金子 大 栄

(大谷大学名誉教授)

武 藤 義 一

(東京大学教授)



## 南無阿弥陀仏ありき

武藤 いままで先生には浄土について、あるいは仏さまについて、いろいろのお話をうかがってまいりましたが、ほんとうの浄土とはこういうものであり、ほんとうの仏さまとはこういうかたであるというところになるとわたくしたちは、もうひとつしっかつかめない。そこで、きょうは、そのところをお話しいただこうとおもうわけでございます。そこがしっかつかないとはかのことほんとうのところはわからないのではないかとおぼろげながら感じているのですが……。

金子 まずはじめに、わたくしにとりましては、どうあらうとも敬虔感情というものが宗教の根本であるということですね。その敬虔感情というものをどのようにかんがえるかについてはまた問題があるでしょうが、たとえば積尊がいわれた自帰依・法帰依ということも、みずからにたよって世にこころを動かさねんようにということであれば一般の識者がいうように、自己に満足して外物を追うことなかれということになるんでしょう。これは儒教などの自敬(自らを敬う)ということおなじようにもおもうのですが、いずれにいたしましても、まずもって敬虔感情というものであるということですね。その敬虔感情と

いうものをもっともよく表現したものは、南無阿弥陀仏であるから、わたしらにとってはまずもって「初めに南無阿弥陀仏ありき」ということから出発しなければならぬ。南無阿弥陀仏においてわれあり仏ありであって、仏とわれとむすびつけた南無阿弥陀仏ではない、そうすればわれというものはいつでも仏にみいだされている自分である。いいかえれば南無阿弥陀仏という場があって、その場においてのみ、われわれは仏とか自分とかいうものをおもうていかなければならぬ。そういうことになる、自己とはなによりも仏にみられているもの、光に照らされているものと、いうことになる。そして、それが自然の

感情でないかとおもうんです。

**武藤** それがどうしてもわたしを仏をみておるといふ感情がさきにたつてしまっています。といって傲慢からそうおもっているわけではないのですけれども、仏にみられているといふふうには仏のほうが主体だという気持ちになかなかならない。やはり我のかたまりが、なかなかとれないのが、われわれなんではないか。

**金子** たとえば、月をみておるんじゃないかと、月にみられておるんだというときにおいてのみあまりなく自分をみる事ができる。自分は月をみておるんだというときには案外自分というものは一向にわからなくなってしまうのではないのでしょうか。また、おおくの人のつかう言葉のなかに、「させていたいただきます」というのがありますね。あれが自然なことではないのでしょうか。食べています、じゃなくて、食べさせていたいです。生きていますじゃなくて、生かさしていただいていますというこのほうが否応のない実際なんでしょう。だから仏を拜むのも拜ま

していただきますというのであり、月をみるのでも、みさしていただきますということになると、むしろの方がこつちをみておつてくださることになる。

#### 敬虔感情について

**武藤** しかし科学の世のなかではどうして自分からみることのほうがさきにたつて、自分がみるんだとおもってしまう。ところが、自分が一人で月をみるということはさびしいことです。しかし、先生のお話のように月からみられておるといふことになる、見られておるのは自分一人じゃない感情がそのなかにあるから、さびしくはない。

**金子** みるということは眼があり、光があり、そしてまた空間がなくてはならない。だからみているほうへだけ力を入れるのは間違いであって、たしかに自分がものをみているのにちがいないけれども、みるようにしてくれたものは光であり空間である。自然科学だって、いくら電子顕微鏡でこまかいことまで

見るにしてもやはり光がなければみれないのじゃないでしょうか。研究の立場においてはみる方へ力を入れなければならないかしれません、みるという事実がどうしてなりたつかというときになれば、みせしめる場と光があるんだということのほうがもう一つ間違いない自然科学ではないでしょうか。わたしはどっちかという自然科学に背くことは好かないのですよ。

**武藤** おっしゃるとおりだとおもいます。自然科学でも、電子顕微鏡で、いままで、だれもみることができなかったものをいろいろみていると知らず知らずのうちに敬虔なところがふかまるということをさきました。人間は傲慢であるけれども、奥ふかいところをみると、人間というものはつまらないものになつてしまい、もつとすばらしい世のなかが自然のなかにたくさんあるということがわかると思います。そのへんにおっしゃる意味の敬虔感情というものが織りなされているようにおもいますけれども、その敬虔感情というのは生まれながらにしてそなわっているものでし

ようか。

**金子** われわれの祖先、原始人が自然を背景として人間生活をはじめたときの感情というものが敬虔感情である。それは実地では敬虔感情をもっておらんものがどれほどあっても、それにはかかわらず、人間というものは本来敬虔感情をもっておるものだという事ではないかとおもいます。自然を背景として地上生活をはじめたものの感情、それが畏れ敬う敬虔さであった。

**武藤** そういたしますと、その敬虔感情の延長として浄土というものが説かれるわけでございますね。

**金子** ええ、説かれてくるんだとおもいますね。

**武藤** いまの人たちは浄土というところ、いつたいそういうものがあるかないかというようにすぐにいうけれども、実はそうじゃなくて、原始人の時代からかたちは変わっても浄土をこい願うところもついていた。今日も、かたちを変えて浄土というものをみんなこい願っているわけで、多くの人のところに願った浄

土というものを象徴的にしめされておるのが浄土教であるというわけですね。

#### なかるべからざる世界

**金子** 自然科学者としてのあなたにきいてみたいのですが、われわれの発見はしばしばなかるべからずとしてあるものが見いだされるところというのが探求ということなのでしょう。そこで、三次元ではどうも説明できないものがあるから、どうしても四次元の空間なかるべからず、ということになる。なかるべからずというのだから実在にちがいない。われわれ常識者はいぜんとして三次元の世界におるが、三次元の世界におればおるほど、そこではどうしても説明のできないものがあるから、どうしてもなかるべからずとして四次元の世界が見いだされねばならない。わたくしは浄土というものはそういうものだとおもうんです。それは、なかるべからずとしてあるものである。それであるのに、それを見いださないうと否定するのはいつも同

じ次元でものをいうてからじゃないかとおもいます。すくなくとも法然上人、あるいはもつと徹底的には親鸞聖人のかんがえられた浄土というものはいつでも超越の世界であつて、この世あればあの世なかるべからず、そのなかるべからざるものこそほんとうは実在なんだというわけですね。わたしは植木鉢の縁に毛虫が這っているのをみてつくづく感じたことがあります、いつまでもぐるぐる廻つていて、もう一つの次元があるということとは知らない。さすが人間はどうもこれだけでは人間のあらゆる生活は説明できないというので、もう一つ高い世界なかるべからずといつて探求する。科学だつてなかるべからずということ、いろいろのものをみつけたてきた。

**武藤** たしかにそうです。湯川さんの中間子でもなかるべからずと予言されかなり後でみつかつているわけですね。

**金子** 浄土は眼にみえるということじゃなくともそれがあるということによって、浄土の教えというものがあつて、それによって

めて現実の世のなかのいろいろな問題が解けていく。そうでないと、この世を浄土にするんだというてみても、それこそ観念になってしまう。

**武藤** いちばんはじめにおたずねしたのもそこなのなです。世のなかのことばかりではわからないことも、仏の世界というものを見いだして、それを人間にあてはめるといろいろのことがわかってくる。そうしますと、そのときにわたしたちが仏の世界をたしかに知り、仏が人間の世界に手をさしのべてくださるのに、南無阿弥陀仏というのが媒介しているというお話だったんですけども、それとありがたいという敬虔感情とはどういう関係になるんでしょう。

**金子** ある哲学者の書物を読んだことがあります。ある哲学の書物を読んだことがあるんですが、ありがたいものというのは個性だということです。つまりわたしたちがわたくしというものは世界に何十億の人間がおつてもただ一人しかない。そして何故ありがたいかというだけ個性があるんじゃないかと、すべての人が個性があるのだが、すべての人

が個性がありながら人間世界を形成することのできるのがあるがたいのである。つまり、それが親子とか夫婦とかという関係でないかとおもいますな。そのありがたさを実感せしめるものが南無阿弥陀仏であり、敬虔感情であります。

**武藤** 浄土教がなぜ説かれたか、何故説かれないかならぬかというとその真実のすがたをしらせんがためということですね。そして浄土を感ずることの利益を人に知らせんがため。

#### 場所ということについて

**金子** 浄土教というものは個人的自覚というよりは人間的自覚というものが、根本であったんではないかとおもいます。たとえば死ぬというような問題でも、お前が死ぬぞというのが生死問題だと教えられてきたけれども、むしろ子に死なれては驚くとか、親に死なれては悲しいとかいうことがある。仏ということですらも個人を問題としてでてくるも

のと、人間を問題としてでてくるものと、なにか異なるものがあるようであります。だから浄土教の思想からいうと、仏あるから浄土あるにあらざる、浄土あるがゆえに仏あるなりと、いいたいものがあるのです。仏あるところ浄土ありということも、間違いないことではありませんが、もう一ついえば浄土あるがゆえに仏あるなり。親あるところ家あるにあらざる、家あるところ親ありというようなことです。親あるところ家あるにちがいない、けれども橋の下でも家かといわれると、ちよつと待って下さいといいたい。親にしても橋の下で満足せよとはいえない。家あつてはじめて、それが親の家であり、親の家にして子の家である。しかも親は親たることを忘れて親であり、子は子たることを忘れて子である、というところに親をして、親として存在せしめ、子をして子として存在せしめる。だから浄土というものは、もう少し高いところにかんがえなければならぬのではないのでしょうか。西田さんの説かれた場所という論文は、わたくしにはよくわかりませんでし

た。ただ場所ということだけを、わたしはひじょうに面白いとおもう。場所というものがあって、その場所をおもうことよって、はじめて人間の問題もとけてくる。煩惱即菩提というようなことを大乘仏教ではいうけれども、どうして煩惱が菩提なのであろうか。煩惱をして菩提たらしめるものはなにかということをおもいますと、争うてみても憎しみ合うてみても愛し合うてみても帰するところここへ行くんだという、そういう場所がないかぎりは解決はつかんようにおもいます。

武藤 生きているのも場所があるからわたしたちは生きているんだし、死ぬのも場所があるから死ぬことができる。それを場所という言葉のかわりに浄土という言葉でおぼえなさいとこういうことですね。

金子 天親菩薩は世尊よわれ一心に尽十方の無礙光如来に帰命し安楽国に生まれんとおもうと、いわれる。そうするとわれがでてる。そのつぎに如来がでてくる。それから浄土(安楽国)がでてくる。この三つがわれわれの思想の中心であるが、その浄土がいちば

んわからぬ。如来はすこしわかる。もう一つわかるのがわれである。ですからわれとはなんぞやということさえ研究すれば、そこから如来もでてくるし、浄土もでてくるにちがいないということ、わたしたちの青年時分にはわれとはなんぞやという問題をずいぶんかんがえたものです。しかし今日ではわたしの頭は逆です。浄土はいちばんわかりやすい。われはいちばんわかりにくい。浄土というのがいちばん自然のものであって、われわれがどうしてもかんがえずにおれないものな感じです。そうすればさきほどもしましたように浄土あるがゆえに仏なるきり、仏あるがゆえにわれあるなりという逆の方向がでてきたという感じですよ。

#### 働きかけるものとして

武藤 やはり、先生が、何十年間もひたむきにわれを追求されたからではないでしょうか。

金子 どうかしれませんが、浄土は

観念の世界だということを用いて問題を起こしたんですが、この世を浄土にせんければならないという浄土観こそ観念の世界なんだ。いや理想でしゅうかね。

武藤 人間のいうことで、仏のいわれることではないわけですね。そういうふうに説かれてくると、浄土は実在だということがおぼろげにわかるんですけれども……。

金子 そこで要求されるならば実在とはなんぞやということがあるとおもいますね。実在というのは時間空間に支配されているというようなかんがえを捨ててしまわなくてはならない。たとえば道元禪師が、月はくまなく照らすが弥陀の光が葉末の露にも宿る、高きは深き道理なるべしといったようなことが実在の論理というものじゃないでしょうか。それで、無限の実在とはかならず有限をつつむものでなくてはならない。有限を有限として照らすものでなければ実在でない。そして有限者のなかへ分け入って、そして高きは深き道理として、あらわれるものでなくてはならない。窺鷲聖人の讚阿弥陀仏偈の和讃には、

光明ということがはじめは光暁と書いてあります。そのつぎは光触といい、そのつぎには光沢と書かれています。これは無量・無辺・無礙ということだ。その無量とは有限者を有限者としてあきらかにする（眺）光であり、無辺とは、すべての有限者を内に摂めるもの（触）であり、無礙とは有限者のなかへさわりなく入ってきて、そこに光の潤いというものがある。いいかえれば光というものはかならず衆生を摂取するものでなくてはならない。そういう働きがなければ実在ではない。

実在は実在として、そこで構えているのではなく、はたらかなければならない。

**武藤** 働きのしめすものじゃないと実在じゃないわけですね。仏教のいちばんもとの教えがそれでございますね。

**金子** 自然科学からいっても、みるものでなくて、みせられたものであるという方向転換ができるものとすれば、その応用もすこし変わってくるんじゃないかしら、人間の眼でもって中間子だの素粒子だのみつけたしたから、また人間の力でこうすればいいというよ

うにかんがえだすと、間違いのものになる。みせられたんだという敬虔感情によってこういうことまでわからしてもろうたんだということが、科学者の立場にあるならば、もう一つ科学者のほうからいい世界ができてくるんじゃないんでしょうかな。

**武藤** そうでございます。人間は能力があれば、いろいろなことがぜんぶわかるんだという気持ちが強かったんです。だんだん研究しておりますうちに、神や仏がみるならともかくも、人間がみるためには光がなければできない。たとえはわれわれがエレクトロンという粒をみようとする。このエレクトロンをみるためには同じ大きさの光の粒をそれにぶつけてやる。そうするとぶつかった瞬間にわかりますけれども、ぶつけられた瞬間相手はどこかへ行ってしまう。神さまとか仏さまがいれば、あれはあっちへ逃げたよということがわかるけれども、悲しいかな人間がみる限りにおいては、ぶつけた光がわからない。そこにわたしたちの研究の限界があるということがわかったのです。そのように人間の能力

の限界ということがいろんな面でわかってきたわけです。それが、やればなんでもできるという気持ちに、いままたすこしなっていることがあるんじゃないかとおもうんですけれども。

**金子** 科学者がいちばん敬虔感情をもっていて、われわれなど知らない自然の妙用というものが、わかればわかるほど、敬虔な態度をもって、実際の問題に応用したならば、もう宗教などといわなくても、自然科学の方

### 「在家仏教」を

おすすめください

本誌「在家仏教」を、お知りあいの方がたに、一人でも多くおすすめくださるようお願い申し上げます。本誌を読むことよって、この人生に、すこしでもよろこびをもって暮らすことができれば、わたくしたちの望外にぞんずるしだいでありませぬ。

からもっと立派な世界ができたんじゃないかとおもったりします。

### 人間の尊厳さのために

**武藤** 自然科学者が研究するときのいちばんの動機は好奇心なんです。もうちょっとついでみたらどうなるだろうかという気持ちです。それを野放ししておくたいへん悪いほうへ行ってしまう。しかし宗教のなかにも初の意味の好奇心というものがあるんじゃないでしょうか。それを失うと、ほんとうのものがわからなくなるんじゃないかという感じがするんですけれども……。

**金子** たとえば浄土教というものが問題になつてどうしてできたかを歴史的に研究をしたりするのも一種の好奇心でしょう。科学だけでなく、宗教家ももっと敬虔感情をとりもどさないとうなるんじゃないかね。

**武藤** 動物学者のポルトマン（スイスのバール大学の総長）というかたがこんなふうにいっています。いろんな動物が母の胎内か

らで、早いのは翌日、遅くたって一週間か十日くらいで歩出し、自分で餌もたべれるが、人間だけが一年も二年も親の厄介にならないと生きていけない。人間がいちばん本能は劣っているが、ただ一つ人間が動物にないものは親の知識をぜんぶ吸収することだ。動物は何万年前の親の親がはじめたところからスタートして、同じ最後を遂げなければいけないから年をとるとみじめであるが、人間は親の知識をぜんぶもらうという本能を与えられているために、親の得た知識の最後のところからスタートして文化を積みあげることができると、そこに動物と人間とのひじょうなちがいがあつたわけで、年とつた人ほど知識が豊富だから世界でも七十、八十で政治の第一線で指導したり、学者でも芸術家でもりっぱな仕事をしておられるということを書いておるんです。そういう意味でわたくしの倍ぐらいも経験を積みあげられた先生から、たくさん教えていただくなくてはならないとおもうのをごさいます。

**金子** ところがね、わたしはそうなら

どうするかということしかかんがえないのです。人間世界へ生まれてきて、そして教えをきいたことのありがたさはなくならん。たとえばいま死んでも今日まで生かしてもろうたということのありがたさが消えない。否むしろ、今日にもしれんいのちであることが、いま生きていることのありがたさということが、諸行無常ということが、人間生活のありがたさをあきらかにするものであるということなのです。だから世界破滅のとききたるとも破滅せんさきに無限とはどういうものであるかということを知り、阿彌陀とはどういうものであるかということを感じさせていたこととはありがたいことじゃないかと感ずる。どうも仏教徒は受身だといわれるけれども、わたしはなにかそういうところのみにあつたかというものがあつたようにおもっています。仏教を信ずれば世界は破滅しないというようなことはわたしはよくいいえません。それは信心すれば死なないというのと同じ理屈であつて……。

**武藤** なるほど、信心してもしなくても死

ぬときは死ななければいけない。

**金子** だから喜んで喜んでも破滅するときは破滅する。けれどそういう破滅の危機がきたるものとすれば、人間同志がいろいろ小細工して、われわれがみな破滅に導いたんだということを総懺悔して、そしてめでたく往生したらいいんじゃないかとおもう。

**武藤** オートメーションという学問をいちばん最初につくったノーバート・ウィーナーという学者が亡くなる直前に書いた論文が、先生とまったく同じことを書いています。地球の運命とか、太陽系の運命というものはわかってる。何万年も何十万年もつづくはずはない。しかし破滅するにしても、人間らしい破滅のしかた、人間の尊厳を汚さない破滅のしかたがあるはずだ。これがわれわれ人間の子孫に伝える使命だということです。

**金子** われわれがひとたび感じたあたりがたさというものはこれでなくなるというところはかんがえられない。なくなるものはなくなるけれども、なくならんものを証明するためになくなるものはあるんだともいえる。

### 限りなき命を感じて

**武藤** 浄土教には無量の寿命ということがありますのでまいりますね。有限だからこそ寿命というのですけれども、それは命寿、無限の寿命というような逆説のない方ですね。光でも限りがあるわけですが、無量の光といっており、有限と無限をひじょうにうまくむすびつけておるとかんがえられるのですけれども、そこはどうなんでしょうか。

**金子** 光が限りないということは明るいだけで闇がないということではなくて、限りない光というのは闇のうちにも輝くということであって、これが限りないということでありませんか。闇いよいよふかくして光いよいよ映えるというようなことなんでしょう。昼は昼の暗さあり、夜には夜の明るさありという言葉もあるんです。いったい光かぎりなしなんて言葉はいついいたされたかしらないが、おそらくその光は、真昼の光で感じたんじやない。夜の暗さのなかへしみ入る光はかりなし

と感じたときに無量の光となる。寿命だって同じことで、消えゆくいのちのうち感じられるものでなくてはならぬのではないかな、永遠というようなことでもね。

**武藤** 永遠だけのものだったらわからないわけですね。

**金子** ええ。だから人生五十年の生涯のうちにかぎりなきいのちというものをうちに感じていく。これこそほんとうにいのちというものではないかとおもいますな。

**武藤** どうもたいへんありがとうございます。

### お願い

本誌に投稿される方は、かならず原稿の控をとっておいてください。投稿原稿は、返却いたしませんから、念のためにもうしそえておきます。